

学校だより



さあ、1学期のラストスパート



梅雨になり、空模様と気温を気にしながら、プール水泳の学習を行っています。1学期も1か月を切り、学習等のまとめをしていく時期になりました。気持ちをもう一度引き締めて、学校生活を送っていききたいものです。

「什の掟(じゅうのおきて)」からの学び

早いもので一学期が終わりを迎えようとしています。4月7日に95名の1年生が入学したのが、つい最近のことのように思われます。その1年生たちが、プールでの水泳学習で約束事を守って学習できるようになっています。また、それぞれの学年も、教室で教科の学習やみんなあそび、今川フェスティバルや校外学習、自然体験学習などの学校教育活動を通して、子どもたちは決まりの中で自主的に楽しむことができました。世の中には、約束事がいっぱいです。

ここで歴史の話をしていきます。江戸時代、会津藩(今の福島県)は人材育成に力を注いでいました。教育施設として藩校・日新館を創設し、同時に教育制度を徹底させました。6歳から9歳までの藩士の子弟は、地区ごとに10人ほどの組に分けて統括されました。この組のことを「什じゅう」と言ったそうです。「什」は什長をリーダーに子どもたちが自主的に活動するもので、会津藩士の子弟としてふさわしい行動ができるよう、集団の中での掟がありました。それが「什の掟(じゅうのおきて)」です。

- 一、年長者の言うことに背いてはなりません
- 一、年長者にはお辞儀をしなければなりません
- 一、うそを言うことはなりません
- 一、卑怯な振舞をしてはなりません
- 一、弱い者をいじめてはなりません
- 一、戸外で物を食べてはなりません

ならぬことはならぬものです

というような内容で、どの町の「什の掟」も最後は「ならぬことはならぬものです」という言葉で締めくくられていたそうです。「ならぬことはならぬものです」は「ダメなものダメ」ということです。人として生きるためには、理屈や言い訳が通らない絶対にやってはいけないことがあるという意味が込められています。礼儀がないこと、うそをつくこと、弱い者いじめをすることなどは、人間として恥ずかしいことだと戒められていたのです。会津藩の子どもたちは、「什の掟」を大人から言われてつくったわけではありません。子どもたちだけで掟をつくって実行していたのです。

什の掟を今の社会、学校教育にそのままスライドすることはできませんが、学ぶところはたくさんあると思います。子どもが幼少期にあるときは、親子間の結びつきのなかでしつけや教育が行われるのが一番です。挨拶や言葉遣い、食事のマナーなどをして生活習慣を身に付けさせ、家の手伝いをさせて褒めたり叱ったりしながら育ていく必要があるでしょう。

また、学校へ通うようになると、教師や友だちとの交流を通じて教育が行われ、そこには信頼関係が大事になります。今川小の児童も、これから多くの人とかかわりながら生きていきます。いつも物事が自分の思いどおりにいくとは限りません。どのようなときであっても、周囲の人のことを考え、我慢すべきときは我慢し、友だちと心を通わせながら楽しい日々を過ごしてほしいと思います。

7月9日(木)から学期末個人懇談会が始まります。お子さまの1学期のがんばりについてお伝えさせていただきます。お忙しいこととは思いますが、ご理解・ご協力よろしくお願いたします。

校長 吉川 秀樹